

平成23年度助成状況

●平成23年度医学教育研究助成金

受賞者			助成金額
貝塚 拓	熊本大学大学院生命科学研究部 助教	分子生理学分野	150,000円
佐藤 叔史	熊本大学大学院生命科学研究部 助教	病態生化学分野	150,000円
石本 崇胤	熊本大学大学院生命科学研究部 特任助教	消化器外科分野	150,000円
小谷 俊介	熊本大学薬学部 大学院先導機構 特任助教	創薬科学分野	150,000円
田浦 学	熊本大学エイズ学研究センター 博士研究員	岡田プロジェクト研究室	150,000円

●平成23年度医学国際交流助成金（外国人留学生奨学金）

受賞者			助成金額
崔 笑怡	熊本大学大学院医学教育部医学専攻 博士課程1年（中国）（公衆衛生・医療科学分野）		150,000円
鄭 珉境	熊本大学大学院医学教育部医学専攻 修士課程1年（韓国）（微生物学分野）		150,000円
尹 今星	熊本大学大学院医学教育部 研究生（中国）（機能病理学分野）		150,000円

●平成23年度医学・生物科学関係の学会・シンポジウム助成金

これまで、公益事業として「国際シンポジウム支援（熊本医学・生物科学国際シンポジウム）」に対する支援を行っていましたが、さらに公益性を高めるために、平成23年度から熊本で開催される他の医学・生物科学関係の学会・シンポジウムに対しても、公募（指定寄附金受入による助成）により支援することとしました。

助成対象事業	開催期間	助成分野（申請者）等	助成金額
第27回熊本医学・生物科学国際シンポジウム	11月23日	熊本大学大学院生命科学研究部 病態情報解析学分野 安東由喜雄教授	7,080,000円
リハビリテーション・ケア合同研究大会 くまもと2011	10月27日～29日	熊本リハビリテーション病院 山鹿真紀夫副院長	2,430,000円

●平成23年度医学研究会・研修会助成金

助成対象事業	開催期間	助成分野（申請者）等	助成金額
熊大病院群卒後臨床研修プログラム 研修医育成	9月1日～3月31日	熊本大学医学部附属病院 総合臨床研修センター長 馬場秀夫教授	200,000円
本九祭（医学展）	11月5日～6日	実行委員長 熊本大学医学部医学科3年 松本崇史	150,000円
蕃滋祭（薬学展）	11月5日～6日	実行委員長 熊本大学薬学部3年 西田健人	50,000円

付け厚労省医政局の事務連絡では、研修プログラム以外の震災地域病院での研修・医療支援を初期研修の一環として差し支えなしとの異例の全国通達がありました。実は、当時、本プログラムの研修医（熊大病院・救急研修中）から東北地方災害支援研修の希望が研修センターに寄せられており、予断を許さない状況ではありましたが、厚生局の了承のもと、病院側のバックアップを得ることができ、指導医とともに石巻日赤への災害支援研修を実現することができました。研修管理委員長である猪俣院長の決断と御協力頂いた関係者各位に深く感謝致します。無事に研修から帰還した報告については、当センターのHPにも掲載中ですので、御一読頂ければ幸いです。また、若い研修医達にとっては直接被災地を体験していないとしても、指導医や研修科の先輩医師の災害地支援を通じて、医療に対する根本的な姿勢を考えさせられた一年だったと思えます。

さて、ご承知のように、新臨床研修制度の導入に関しては「光と影」が指摘されています。確かに幅広い知識と技能の習得には一定の成果が見られるものの、影の部分として都市への医師の集中・地域医療崩壊・診療科偏在・研究志向性の低下・大学院進学率の減少・論文数の減少・海外留学生の減少など、さまざまな問題点も指摘されています。これらの諸問題に関しては、学内外の指導医の先生方のご意見や研修医の希望も取り入れながら、臨床研修実施体制を少しでも改善していく所存です。

今後、総合臨床研修センターでは熊本大学および協力病院・施設における臨床研修を通じて、わが国の医学・医療の発展に寄与できる、また、地域医療に貢献できる、夢と希望に燃えた次世代の医師育成・医師確保に一翼を担う所存です。これらの活動は関係各位のご理解とご支援があつてのことであり、なかでも公益財団法人肥後医育振興会の皆様の多大な御支援に改めて感謝申し上げます。今後ともよろしくお願いいたします。

熊本大学医学部附属病院総合臨床研修センター センター長 馬場 秀夫

東日本大震災に対する 義援活動

平成二十三年三月十一日に発生した東日本大震災の被害者の皆様方のご支援のために、本財団では平成二十三年度の予算に百万円の義援金枠を計上いたしました。医育に絡んだことがらに優先的に支援することにし、まず、熊本大学医学部、熊本保健科学大学、並びに九州看護福祉大学の学生の中に東日本地域から来熊して実家が被災した人たちがいるかどうかを各大学の方で調べていただき、また、熊本大学と熊本保健科学大学に二名ずつ該当者がおられましたので、各学生に十万円ずつのお見舞い金をお渡しいたしました。

籍した診療科をそのまま三年目に専攻する「入局型」の研修も見受けられました。が、専攻決定時期は年度末後半という結果でした。まだ一期限りの結果であり、研修制度変更による影響は特定できませんが、二年次もローター型型の研修が多かったと考えられます。少なくとも平成二十六年までは厚生労働省は現在の方式で研修制度を継続する予定となっております。

ここで、平成二十三年年度の研修について東北大震災の関わりを触れさせて頂きます。厚労省からは研修環境が保てなくなった病院で研修の移動など余儀なくされた研修医が一〇名以上報告されています。病院の存続自体が大きな影響を受けており、止む得ない状況でしたが、この事態に対し厚労省は研修医の移動や研修修了について比較的柔軟な対応を発表していました。なかでも同年三月二十二日

付け厚労省医政局の事務連絡では、研修プログラム以外の震災地域病院での研修・医療支援を初期研修の一環として差し支えなしとの異例の全国通達がありました。実は、当時、本プログラムの研修医（熊大病院・救急研修中）から東北地方災害支援研修の希望が研修センターに寄せられており、予断を許さない状況ではありましたが、厚生局の了承のもと、病院側のバックアップを得ることができ、指導医とともに石巻日赤への災害支援研修を実現することができました。研修管理委員長である猪俣院長の決断と御協力頂いた関係者各位に深く感謝致します。無事に研修から帰還した報告については、当センターのHPにも掲載中ですので、御一読頂ければ幸いです。また、若い研修医達にとっては直接被災地を体験していないとしても、指導医や研修科の先輩医師の災害地支援を通じて、医療に対する根本的な姿勢を考えさせられた一年だったと思えます。